

運動会の歌に宿る利他の精神

前回の坂本小学校だよりで、運動会の歌のお話を書かせていただきましたところ、大勢の方に情報を提供していただきました。協力してくださった皆様、本当にありがとうございました。

皆様の情報から、「昭和47～8年頃までは歌われていた」「4番まであり、開会式で1・2番、閉会式で3・4番を歌っていた」「この歌の他にも団ごとに応援歌があった」など、いろいろなことが分かりました。

中にはお手紙で当時の様子などを書いてくださった方や、メロディーを楽譜に起こしてくださった方もいらっしゃって、大変感激しました。

学校だよりをたくさんの方が読んでくださっていること。そして、この文章を通していろいろな方とつながっているということに改めて感じました。また、皆さんの心の中に、幼き日の運動会の思い出がずっと生き続けているのを感じ、今後も日々の教育活動に誠心誠意当たっていきたいと気持ちを新たにしたところでした。

皆様からお寄せいただいた運動会の歌の歌詞を読んでいて、あることを思い出しました。それは、以前、児童の修学旅行の引率で行った「知覧特攻平和会館」で読んだ、特攻隊員の手記です。

行かれたことのある方は知っていると思いますが、特攻隊員が出撃前に両親や家族へ宛てた手紙や遺書などが多数展示してあります。そのどれもが、きびきびとした文章と、力強い筆運びで記されており、両親への感謝や家族への愛情があふれるほどに綴られています。そして、どの手記からも伝わってくるのは「利他（他人の幸福を願うこと）の精神」です。今から死を迎えようとしている時にすら、自分以外の人を幸せを願っているその生き方には、当時の日本人が大切にしていた「利他」の思想が読み取れました。ふいにこのことを思い出したのは、「運動会の歌」の歌詞にも同様にそれを感じたからです。

待ちに待ちたる運動会
明けゆく空に 雲晴れて
日も輝ける 気も清し
いざいざ来たれ 我が友よ

天高く、澄み切った青空の下、引き締まった気持ちで開会式に臨む子ども達の姿が目につかぶような歌詞です。注目すべきは最後の一文です。「いざいざ来たれ 我が友よ」待ちに待った運動会が来たことを喜ぶ中、仲間の存在を強く意識する言葉が入っているのが印象的です。さらに3番には「人の中たる人となれ」が、4番には「今日より勝る明日を待て」という歌詞があります。

運動会が「単なる競技の場」ではなく、「友だちを大切にせよ」「日々精進せよ」という「生き方を学ぶ場」であることを訴えかけているのです。

おそらく、当時の日本の教育や、親の躰、いや、日常的な会話の中にも、このような言葉や思いがたくさん詰まっていたのではないかと思います。

現代は悲しいかな「利己主義」の時代です。新聞やテレビを賑わす事件や事故の多くが、「利己の精神」によって生み出されているのを感じているのは私だけではないと思います。

そんな中であって、この五ヶ瀬で暮らしていると、「利他の精神」に触れる機会が多々あります。それはきっと、この運動会の歌を歌っていた世代の皆さんの教えが、親から子へ、そして孫へとしっかり受け継がれているからではないかと思います。

さて、「運動会の歌」復活の材料がそろってきました。来年の運動会では地域の皆様と一緒に歌えたら良いなと思っています。

子ども達の健闘をたたえます！

◇西臼杵郡小学校陸上教室

6年生

女子800m走

第2位 松田紀美香（2分55秒2）

男子走り幅跳び

第3位 甲斐右恭（3.57m）

男子選抜100m
 第4位 長田墨生（15秒8）
 男子400mリレーB（男女混合チームで出場）
 第3位（1分4秒1）
 長田墨生 松田紀美香
 甲斐右恭 藤川秀虎

5年生

女子50mハードル
 第2位 落合史蘭（10秒4）

◇例大祭奉納剣道大会

団体戦 第3位 坂本道心会

◇第45回鞍岡祇園神社大祭奉納剣道大会団体戦

準優勝 坂本道心会B

第3位 坂本道心会A

個人戦

1年生の部	準優勝	篠村桐心
	第3位	甲斐遥己
2年生の部	第3位	甲斐翔也
	第3位	篠村大河
3年生の部	優勝	畦池颯海
4年生の部	第3位	甲斐紳之将
5年生の部	優勝	落合史蘭
	準優勝	菊池明楽
6年生の部	準優勝	藤川秀虎
	第3位	甲斐右恭

◇第37回古戸野神社秋の大祭奉納剣道大会

団体戦 第1位 坂本道心会A

第2位 坂本道心会B

個人戦

1年生の部	第2位	甲斐遥己
	第3位	篠村桐心
2年生の部	第3位	篠村大河
	第3位	甲斐翔也
3年生の部	第1位	畦池颯海
4年生の部	第3位	甲斐紳之将
5年生の部	第1位	落合史蘭
	第2位	菊池明楽
6年生の部	第1位	藤川秀虎
	第2位	甲斐右恭

バードウォッチング

禅の言葉に「啐啄（そったく）同時」と言う言葉があります。卵の中の雛鳥（ひなどり）が殻を内側からつつく音を「啐」、それに応えるように親鳥が外側から殻をつつく音を「啄」、その二つがタイミングよく合

わさり、殻が破れ、雛鳥が誕生する様子を表した言葉です。つまり、禅の世界における弟子を雛鳥に、師匠を親鳥に例



え、弟子の修行が円熟に近いことに気付いた師匠が機を逸することなく悟りの機会を与えてあげることで、教えが成就することを表しているのです。

このことは、教えられる者（子ども）と教える者（親、教師）の理想の姿を私たちに教えてくれます。つまり、教えられる者の「自発」と教える者の「指導」が一致したときに初めて効果が表れるということです。「ほんの少し待ってあげれば、子どもが自ら理解したり、行動したりするのに、時を急いで教え込もうとして逆に子どものやる気をそいでしまった。」「教えなくてはならない大切な時期を逸して、手遅れになってしまった。」そういう経験は、教えられる側だった若い頃も、教える側となった今も、みんなもっているのではないのでしょうか。

親離れをしない子、子離れをしない親が多くなっているといわれる現代、まさにこの「啐啄同時」のタイミングを見誤ることなく子どもの自立を促したいものです。

おまけ 頭の体操

問題 （立教中入試問題）

5つの整数が小さい順にABCDEと並んでいます。このうち2つの整数の和を求めると、17、22、25、28、31、33、36、39の8種類となります。ABCDEはそれぞれいくつでしょう。

答え A B C D E

※ 答えがお分かりになられたら、学校まで連絡ください。

坂本小学校の合言葉

あ あかるく
 し しんげんに
 た たくましく